

機会と選択を繰り返して 創られるキャリア

将来の目標から逆算した進路指導だけでは難しくなっています。そうしたなか、「自分が起こした意図的な機会」だけでなく、「外部要因で起きた偶発的な機会」も能動的に捉え、選択・行動することの繰り返しが高校生の視野を広げ、キャリア観を形成していくのではないかと。そうした仮説を、解説編と対談編を通じて探ってみました。

1 Part

解説

Explanation

偶発的な機会や小さな一歩から 広がる新しい世界

「やりたいこと」の有無にかかわらず、高校時代の豊かな機会や体験は、若者のキャリア観に大きく影響します。次世代社会のキャリア形成に詳しい研究者の古屋星斗さんに解説して頂きました。

体験や機会があつてこそ
生じる学びたいという動機

ベストセラー『LIFE SHIFT』で人生100年時代を提唱した組織論学者のリンダ・グラットンが、「教育↓仕事↓引退」という3ステージの人生の崩壊と、それに代わるマルチステージの人生を提起しました。確かに今、人生における選択の回数は飛躍的に増え、それらが訪れる時期も早まっています。転職、副業、起業、育児、介護離職などの選択の機会が次々と現れる結果、高校卒業時の進路選択は、人生を左右する最大の機会とは言えなくなりました。数ある選択の最初の一つに過ぎなくなっているわけです。

重要性が下がったわけではありません。ただし、その意味は大きく変化しつつあります。「自分は何をしたのか」を考え抜いて選んだ経験が次のステージでの満足度につながり、その次の選択でも活かせることがわかっていきます。例えば、「21世紀出生児縦断調査」(文部科学省・厚生労働省)によると、大学などの進学先を、「将来就きたい仕事と関連しているから」という理由で選んだ人は、大学生活の満足率が50%である一方、「合格できそうだったから」という理由で学校選択を行った人は満足率が25%です。

先調査からは、職場体験や職場見学が学習動機を増進させることもわかっています。考えるまでもなく、例えばJAXAで宇宙飛行士の話を聞き宇宙関係の職に就きたいと思えば物理学を学びますし、JICAで海外協力隊の話を聞き国際貢献したいと思ったら英語を勉強しますよね。体験があつて学びがある。ところが日本の学校では、この順番が逆になっているケースが多いように感じます。教育実習もそうですが、座学で理論を学んだ後に実習がある。体験があつて初めて、学ぶ必要性を実感するのに、そのときには時間が足りません。社会人になってから「あれを学んでおけば…」と後悔してはもったいない。

こんな調査結果もあります。「大手企業新入社会人の就労状況定量調査」



リクルートワークス研究所
主任研究員
古屋星斗さん

ふるや・しょうと ●一橋大学大学院社会学研究科修士後、経済産業省入省。産業人材政策、投資ファンド創設、福島復興・避難者の生活支援、政府成長戦略策定に携わる。2017年より現職。専門は労働市場分析、未来予測、若手育成、キャリア形成研究。一般社団法人スクール・トゥー・ワーク代表理事。近著に『会社はあなたを育ててくれない』(大和書房)。

(リクルートワークス研究所)によれば、入社前の社会的経験(「複数の企業・職場の見学」「中高時代に複数の社会人から仕事の話を聞く経験」「長期のインターンシップ」「知人ではない多人数の前でプレゼン・スピーチ」など)の多寡が、若手社員の職場に対する評価やキャリア意識(満足感やいきいき感)と相関しているということがわかっています。

こうした調査を総合すると、若いときの社会的経験が、こんなことを学びたい、こんな仕事に就きたいという動機につながり、それが進学・就職先での満足度やその後のキャリア形成に影響を与えていることがわかります。

本人の合理性を超えた機会の提供によって視野が開かれる

とはいえ、現実には将来の目標や就きたい仕事を見つけている高校生は決して多くはない。やりたいことがあるというのは、恵まれていることでもあるのです。ただ、その恵まれた高校生にも落とし穴があります。それは「現在地と目標との間にあると本人が認識している機会しか、本人が機会として認識できない」ということです。若者に限らず、誰しも目標が明確であればあるほど、その途上にはない機会は、無駄なものとして切り捨ててしま

いがち。目標があるのなら、最短距離を行きたくなるものだからです。

しかしながら、「計画的偶発性理論」を提唱したスタンフォード大学のクランボルト教授や、「キャリア・ドリフト」という概念を提唱した神戸大学の金井壽宏名誉教授らが指摘する通り(次ページ参照)、キャリア形成において偶発的な出来事の影響力は計り知れません。多くの大人はこれまでの人生を振り返ったとき、偶然の積み重ねの上にキャリアが築かれてきたことを肌感覚で知っているでしょう。

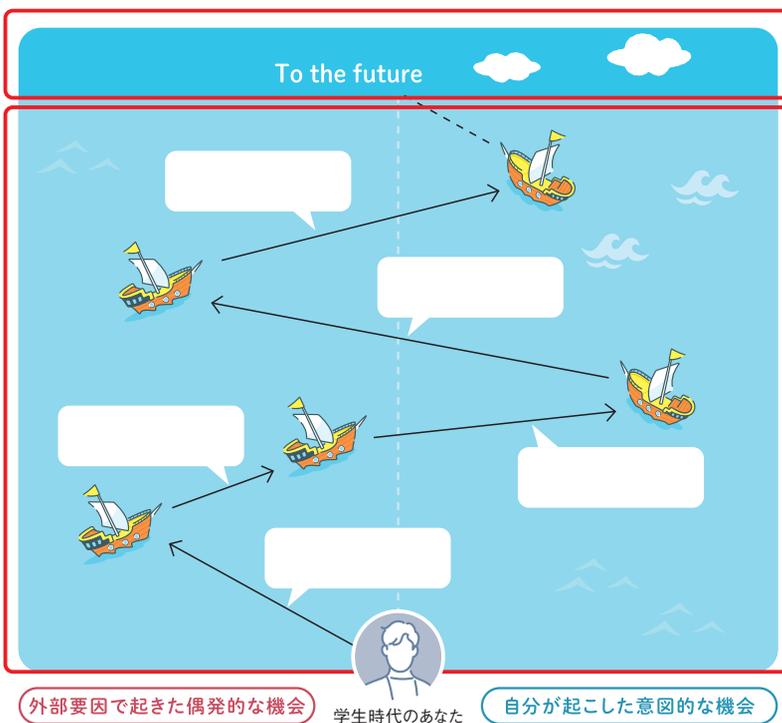
だからこそ、やりたいことが明確な生徒に対しては、新しいトビラを開けるチャンスを見落とさないよう、時おり、本人の視界の外にある機会に目看向くようフォローすることが大切です。

もちろん、早くに目標を決めるにしたことはありません。最大の理由は、新たな目標が見つかったとき再挑戦しやすいからです。私の好きな言葉に、「目的地のない船に追い風は吹かない」というものがあります。目指す方向が決まって初めて、今吹いている風が追い風なのか向かい風なのか判別できるし、今置かれている環境が良いか悪いかも判断できます。

ただし、その目的地はあくまで「仮決め」のようなもの。次のステージで何が起るかは、その時点ではわかり

Worksheet

あなたはこれまで、どんな「機会と選択」がありましたか？



さまざまな機会の積み重ねによって、ありたい姿や就きたい職業が見えてきたとしても、それはあくまで「仮決め」のようなもの。人生100年という響きから長距離マラソンを走り続けるイメージがあるかもしれませんが、選択の回数が増えるこれからの社会は短距離走の連続。ひと呼吸おいた後、次の未来が広がっていきます。

多くの人は「さまざまな機会によって自分のキャリアは創られてきた」と振り返ります。機会には、自ら起こした意図的なものもあれば、「人に恵まれた」「たまたまチャンスが転がってきた」など、外部要因で生じた偶発的な機会も少なくありません。そうした機会をどう捉えるかが主体的なキャリア形成の鍵となります。

ません。大手企業で活躍していた方が退職後に始めた、まったく異なる仕事を「これこそ天職」と感じたという話もあります。変化の激しい現代社会においては、いつになっても「本決め」する必要すらないのかもしれない。

「言い訳」を伴うスモールステップが新しいトビラを開く機会に

では、「やりたいことがない」多数の高校生には、どのようなアプローチが有効でしょうか。キャリア観を変えるような社会的経験や機会に意図的に出会うには、それなりの労力がかかります。企業の人に連絡をとったり、地域の大人と話したりといったアクションは高校生にとってハードルが高いでしょう。けれど、そうした耳目を引く行動だけにキャリア観を変える力があるわけではありません。その前の助走のような行動にも少なくない力があることがわかっています。例えば、

- 挑戦したいことを友人に話してみる。
- 話したことがない人とコミュニケーションをとる(小さな他流試合)。
- 友人に誘われたイベントに行ってみる。
- がんばっている友人を応援する(応援しているうちに疑似体験したり、焦りが生じたり)など。

しかし、こうしたスモールステップの

重要性を提唱し、奨励し始めると今度は、若い人から「スモールステップはどう起せばいいですか?」と質問されるようになりました。私としては、必要性さえ感じれば誰でも実行に移せる小さな行動と考えていたため、こうした問いは想定外でした。

反省を込めて、検証し直すなか、浮上してきたのが、「言い訳」の有無でした。例えば、「先生に言われて仕方なく」「親に言われてシブシブ」「友達にむりやり」といった言い訳があることで、人は行動しやすくなります。キャリアに関する何らかのイベントに参加する際、向上心がある様子を周囲に見られることを気恥ずかしく感じる年頃の高校生も、「先生に言われて仕方なく」という顔をしていれば気が楽です。変化が起こる瞬間に注目した場合、動機は体験から生まれており、その体験に接触する際のきっかけは自発的なものに限らなかつたのです。若手向けの勉強会後のアンケートで、「本当は来る気はなかつたのですが、上司の指示で参加したところ、大変刺激を受けました。例えば…」という長文の感想を頂くことがあります。思うに、そうした機会でも最も得をしているのは、なにかしらの言い訳があつて参加した人だと思えます。自ら

キャリア理論解説

【計画的偶発性理論】

スタンフォード大学のクランボルツ教授が1990年代に提唱したキャリア理論。個人のキャリアの重要なチャンスの80%は予期せぬ出来事によって起こるとし、そうした偶発的な出来事が到来した際に機会を逃さないための力、行動特性として「好奇心」「持続性」「柔軟性」「楽観性」「冒険心」の5つを提示。また「未決定」の状態を単なる優柔不断ではなく肯定的に捉え、学習をもたらすための望ましいもの一つとした。

【キャリア・ドリフト】

金井壽宏(神戸大学名誉教授)が提起した概念。ドリフトとは漂流のことで、流れの勢いに乗るというニュアンスも。自分のキャリアについて大きな方向づけ(キャリア・デザイン)さえできていれば、節目と節目の間は偶然の出会いや予期せぬ出来事をチャンスとして柔軟に受け止めるために、あえて状況に流されるままであること(キャリア・ドリフト)も必要と指摘。

【越境学習論】

日本で2010年代以降注目されている理論。代表的な研究者である石山恒貴(法政大学大学院政策創造研究科教授)によれば、自らが「準拠している状況」と「その他の状況」を分ける境界を往還し、そこから学びを得ること。いわゆるホームとアウェイを往復することで、ホームだけでは得られない経験や知見を得て、ホームで得たものに組み合わせる。

の意思で参加した人は、いずれ別の場所でも似た知見を得ることはできそうですが、そうでない人は、一生出会うことがなかつたかもしれない知見を得た可能性が高いからです。

総合的な探究の時間も、ある意味、言い訳から始まる時間と言えるかもしれません。解決したい課題のあるなしに関係なく全員が受ける必要があり、けれど取り組むうちに、のめり込んでいく生徒がいるのはご承知の通りです。総合型選抜への準備も似たところがあります。高校生からよく「職業について調べているので話を聞かせてください」というインタビュー依頼があります。聞けば、レポートにまとめポートフォリオの一つとして大学に提出する材料にしたいとのこと。ま

た、ボランティア団体の代表からは「最近、高校生がたくさん来る」と聞きました。どうも自己PR書類のためのボランティア証明書が欲しいらしいのです。

こうした行為を、大学合格を目的とした打算的なものと切り捨てることは簡単です。けれど、やりたいことを見つけたくても、きっかけがなく、将来に対してモヤモヤしている生徒にとっては実は大きな一歩を提供している。ボランティア団体の代表もこう続けていました。「ですがその後、ボランティアを熱心に続けてくれる子が何人も残るんです」と。言い訳をきっかけに何らかの機会に触れることで開かれる新しい世界もあるのです。(次ページからの対談もご覧ください)